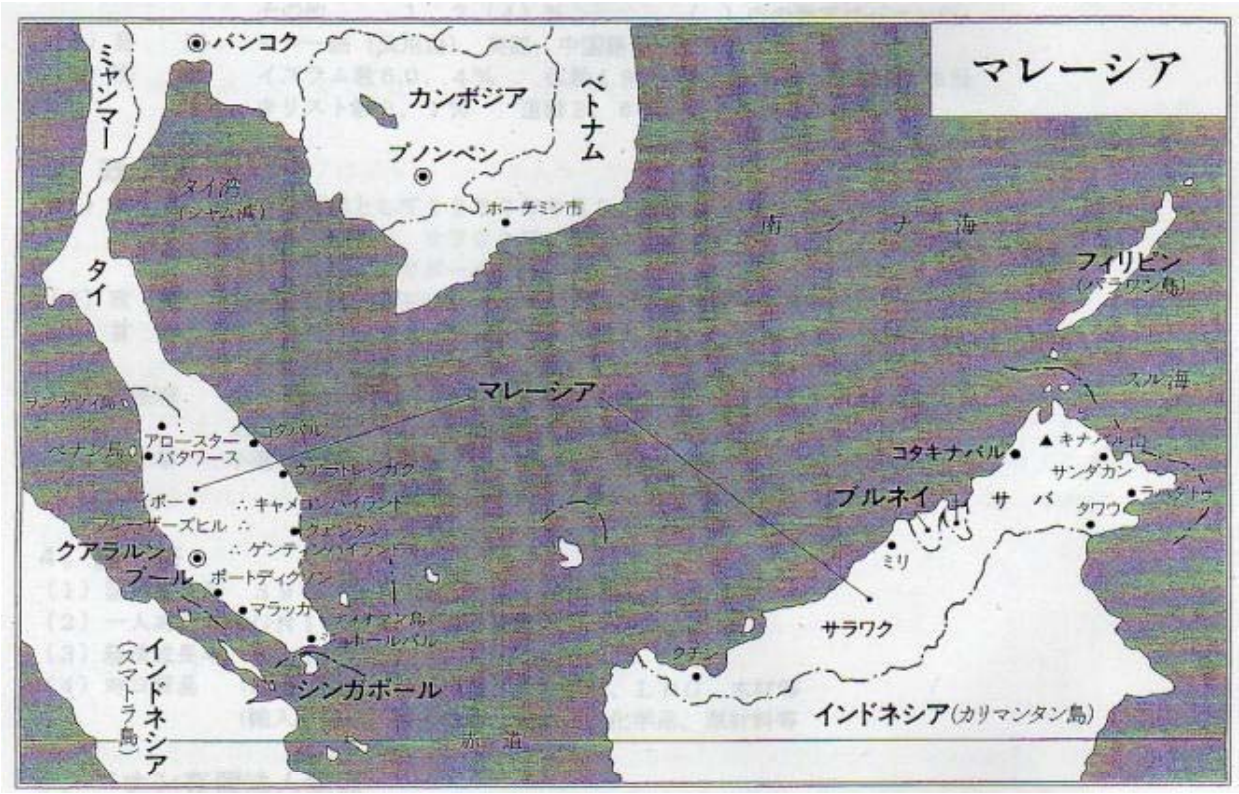
帰国教員研修会資料

マレーシア
ペナンに暮らして



旭川市立正和小学校長　菊　地　政　幸

派遣期間　：　平成14～16年度

派遣先　　：　ペナン日本人学校

Ⅰ．マレーシアの主要な社会・政治・経済指標等

１，自　然

（１）面　積　　３３０，４３４ｋ㎡
（２）位　置　　北緯１度～７度２５分　統計１００度０８分～１１９度２０分
（３）気　候　　熱帯雨林気候
　　年間降水量　６０００㎜（最多雨地）　２６５３㎜（ペナン）
　　年間最高気温３３．５℃　　年間最低気温２４．３℃

２，社　会

（１）人　　口　　２５，４４８千人
（２）人口密度　　７７．０人／ｋ㎡
（３）民族構成　　マレー系　６１．４（３８）％
　　中国系　　２３．８（４７）％
　　インド系　　７．１（１１）％
　　その他　　１．２（４）％　　（　）内の数字はペナン州
（４）言　　語　　マレー語（公用語）、英語、中国語、タミル語
（５）宗　　教　　イスラム教６０，４％　　仏教１９，２％　　ヒンズー教６，３％
　　キリスト教９，１％　　道教２，６％　　その他２，３％

３，政　治

（１）独　立　　マラヤ連邦として１９５７年８月３１日独立
　　１９６３年サバ、サラワク両州及びシンガポールを加えマレーシアとして発足
　　１９６５年シンガポール分離
（２）政　体　　立憲君主制　国王は９州のスルタンによる互選（任期５年）
（３）首　相　　ＹＡＢダト　スリ・アブドゥラ・ビン・ハジ・アマッド・バラウィ
　　（前首相は　ダト・スリ・ドクター・マハティール・モハマド）
（４）立法府　　上・下院の２院制　上院６９名（任期２年）　下院１７７名(任期５年)
　　上院６９名のうち４０名は国王が選任
（５）選　挙　　小選挙区制　選挙権は２１歳以上の男女
　　被選挙権は上院３０歳以上、下院２１歳以上

４，経　済

（１）国内総生産　３９２，０１２ｍｉｌｌｉｏｎＲＭ
（２）一人あたりのＧＮＩ　１４，５９２ＲＭ
（３）経済成長率　８．７％
（４）対日貿易　（輸出）機械、輸送機器、鉱物燃料、ＬＰＧ、木材等
　　（輸入）機械、輸送機器、製造品、化学品、原材料等

５，ペナン在留法人関係

（１）在留邦人　１，２９３人
（２）日系企業数　　１３７社

６，ペナンの面積

ＰＵＬＡＵ　ＰＩＮＡＮ　２９２，６４ｋ㎡
ＰＥＲＡＩ　　７３８，４０ｋ㎡　　ＴＯＴＡＬ　１０３１，０４ｋ㎡

７，ペナン日本人学校の位置

北緯　５度２３分２３秒　　東経１００度１８分５１秒

Ⅱ．　概　　要

１，マレーシア「急速に発展するモザイク国家」

マレーシアは、東南アジアに位置する熱帯の国。マレー半島とボルネオ島に一部からなる国土は、約３３万平方キロメートルと日本よりやや狭い。総人口は、約２，２００万人。マレー系６０％、中国系２８％、インド系８％、そして若干のアラブ系、ヨーロッパ系、ユーラシア系（混血）などで構成されている。それぞれが融合することなく、モザイク模様のように共存している複合国家である。１９６９年の人種暴動以降、民族間の社会的格差を縮め、融和を計ることを最大の国家課題としている。経済的に大きく立ち後れていたマレー系をあらゆる面で優遇し、他民族と競合するだけの力を付けさせるため、「ブミ・プトラ政策」を導入している。なお、ブミ・プトラとは 「土地の子」という意味で、マレー系を指す。

政治体制は、第２次世界大戦後、１９５７年８月に英国の植民地統治から独立して以来、民主主義体制をとっている。

外交面では、東南アジア諸国連合（ＡＳＥＡＮ）の一員として、他のメンバー国と密接な関係を維持、発展させている。また、英連邦の一員であり、英国及び他の英連邦諸国との結びつきが強い。さらに、イスラム教を国教としているため、中東そのほかのイスラム教国との関係も深い。

日本との関係では、第２次大戦中、日本軍により占領された歴史がある。マレーシアの独立後、両国間の関係は緊密化している。特にマレーシアにとって日本は、貿易、投資、経済協力の面で最大の相手国となっている。日本に対する関心は高い。

１９８１年１２月、マハディール首相間は、日本の労働倫理や勤労意欲などを学び、マレーシアの国造りに生かすことを目的として、「東方政策（ルック・イースト）」を提唱した。１９８２年の開始後１９９９年までに、５，５４０人のマレーシア人が産業技術研修生、大学および高等専門学校などへ留学生として、日本で研修・留学している。

２，ペナン「プラウ・ピナン（真珠の島）」

香港をはじめ「東洋の真珠」といわれる場所はいくつかあるが、ペナンもその一つである。ペナン州は、マラッカ海峡に浮かぶペナン島と対岸ウェルズレイからなり、両者の間は天然の良港として近世に開かれ、栄えてきた。海抜約８３０メートルのペナンヒルからの眺望は壮麗で、まさにペナンが「東洋の真珠」の名に値することを実感できる。ペナン島の中心地ジョージタウンは、英国人によって開かれた街である。現在は中国系人が多く、中心街は活気に満ちあふれているが、一歩住宅地にはいると、英国風の落ち着いたたたずまいを見せている。ジョージタウンから、ペナン島北部のバトゥフェリンギに至る海岸道路は、山側を削り、七曲がり八曲がり、あたかも伊豆東海岸を思わせる風景である。バトゥフェリンギはリゾートホテルが立ち並び、白砂の海岸が続き、観光客の人気を集めている。１００年以上にわたり、ペナンはシンガポールとならぶ自由港として栄えてきたが、１９４９年頃から自由港廃止の動きが始まり、ことに１９５７年のマレーシア独立後この動きが具体化した。１９６３年１０月、自由港廃止問題は一時棚上げされたものの、１９６４年には徴税区域に含められ、自由港としての地位は衰退に向かった。１９７０年に入ってからはむしろ自由港としての地位維持に代わって、自由貿易区設置の方向に努力が集中した。１９７７年１２月１９日、ペナンの関税に関する特殊な地位を廃止する宣言がなされ、ペナンは正式に自由港としての地位を失った。見るべき天然資源、産業のないペナン州は、商業貿易に大きく依存してきたが、自由貿易港廃止の動き伴い、ペナン経済は苦境に直面した。ペナン政府は、経済を救うために、膨張した人口圧力を背景に急速な工業化を図るとともに、観光振興及び都市再開発を含む近代化を進めてきた。工業化においては、外国企業を誘致して自由貿易区及び工業団地を創設し、輸出、産業の育成を図ってきた。さらに、ペナンは第３次マレーシア計画以来、５年計画（現行は第７次計画）に沿って発展を続けている。これは、ペナンの方向転換が成功したことを物語っている。ペナンはこれまでの成果に基づいて今後も外国資本の導入促進及び国内資本による投資奨励を軸として、工業化を従来にもまして推進していくと思われる。また、観光開発にも重点を置き、関連施設の拡充及び海外での宣伝強化などの施策を通じて、観光客誘致を積極的に進めていくことだろう。

Ⅲ．略　　史

１，マレーシア

有史以前のマレーシアについては、ほとんど知られていない。わずかに、紀元前２０００年～同１５００年頃の新石器時代の遺跡が残るほか、半島西海岸地帯で紀元前２０００年頃の金属品の使用を示す遺物が発見されているにすぎない。

したがって、記述に残るマレーシアの歴史は、１４世紀末に成立したマラッカ候国の時代に始まる。マラッカ候国は、マレー半島の大部分及びスマトラ東海岸を版図に収め、東アジアと西アジアの貿易中継地として栄えた。１５１１年、ポルトガルがマラッカ候国を支配するに至ったが、１６４１年にポルトガルの勢力はオランダによって駆逐された。さらに、ミナンカバウ（中部スマトラ人）及びブギス（北スマトラ人）の侵攻によって、１６９９年マラッカ候国は滅亡した。しかし、マラッカ候国の政治制度はその滅亡後も各地に残され、マレー半島各州の候国制度は１９世紀まで続けられた。

１８世紀を通じ、ブギスはジョホールを中心としてオランダと半島の支配権を争った。同時に、マレー人とも相容れなかったので、トレンガヌ、ヌグリスンビラン、クランタン、セランゴールなどにそれぞれ候国が建国された。

１９世紀に至り、マレー半島及び北ボルネオは、ヨーロッパの政治的、経済的圧力を強く受けるようになった。特に、英国の政治的圧力が強まるに従い、外国からの投資、移民が急増した。また、半島西海岸でスズ鉱採掘が開始されるに伴い、中国人による新しい都市が造られた。ただし、一般のマレー人は、このような外国の影響を直接受けることは少なかった。各地の首長は、支配地から収益が得られなくなることから、英国の支配に抵抗し、反英闘争が続けられた。しかし、英国の軍事力に抑圧され、最後に１９１９年、トレンガヌ州が英国人顧問を受け入れて、英国の半島支配が確立した。

２０世紀の初頭、ゴム栽培が開始されるようになると、インドからタミール人の移民が増加した。第１次世界大戦が勃発後、１９１５年にはシンガポールでインド人の反乱が発生した。また、中国、インド、インドネシアから、マレー人の間に革命思想が導入された。１９２０年代初頭には政治不安が続き、大恐慌時代まではマレー共産党及び中国国民党の活動が活発化した。その後も、英国の植民地支配に対するマレー人の不満が高じ、労働争議、暴動が続発した。この間、多くのマレー人、インド人の政治家が輩出した。１９４１年１２月、太平洋戦争が勃発し、続いてマレー半島、ボルネオは日本軍に占領された。日本軍の占領は、白人優越の神話をうち破るとともに英国の植民地支配を一掃したため、マレー人の政治意識は向上し、国家独立への志向が強まった。

戦後、英国は植民地支配を再び導入したが、マレー人の強い抵抗に合い、ペナン、マラッカを除くマレー半島にマレー人を名目上の支配者とするマレー連合の結成を提案した。マレー人はこの提案を不満とし、ダト・オン・ビン・ジャアファルが統一マレー国民組織（ＵＭＮＯ）をマレー半島全土に組織した。このため、英国はマレー連合案を断念し、１９４８年、ペナン、マラッカを含むマレー連邦案を提案した。しかし同時に、ゴム園、スズ鉱山を所有する英国人及び穏健派中国人を対象に、共産党が暴行、殺人行為を続発させたため、１９４８年６月、緊急事態が宣言された。その後、共産党勢力は暫時制圧され、緊急事態は１９６０年８月にいたって解除された。１９５５年、新憲法が提出され、同年７月の選挙において、ＵＭＮＯ、マレーシア華人協会（ＭＣＡ）、マレーシア・インド人会議（ＭＩＣ）からなる国民戦線（ＢＮ）が、５２議席のうち５１議席を獲得した。１９５６年ロンドン会議で独立問題が討議された。１９５７年８月にはマラヤ連邦制定が英国との間で調印され、同年８月３１日マラヤ連邦の独立が正式に達成された。北ボルネオは、１９４６年英国軍統治終了後も、英国の直轄植民地として残された。

その後、マラヤ連邦政府がシンガポール、サラワク、北ボルネオ住民と２年間にわたって交渉した結果、１９６３年９月１６日、これら地域を含むマレーシアが成立した。けれども、マレーシアの結成に対して、フィリピンは北ボルネオに対する主権と領有を主張して反対し、外交関係を断絶した。インドネシアも、思想、政治、経済上の諸理由から成立に反対し、対決政策をとった。１９６５年には、シンガポールとマレーシア中央政府との関係が緊張化し、同年８月７日、シンガポールの分離が双方の間で合意された。インドネシアでは、１９６５年のいわゆる９・３０事件を契機にスカルノ政権が倒れた。代わってスハルト新政権が誕生して、３年間に及ぶインドネシアのマレーシアに対する対決政策は解消された。１９６６年８月１１日、ジャカルタにおいて両国代表が和

平協定に調印、１９６７年８月３１日、両国間の外交関係が再開された。インドネシアとの関係改善に伴い、フィリピンもマレーシアを承認し、１９６６年６月３日、両国間の外交関係が再開された。しかし１９６８年、フィリピン軍隊がサバ州で破壊活動を行い、同年９月１８日フィリピンのマルコス大統領がサバ領有法案にサインするに及んで、両国間の外交関係は再び停止され、この状態は１９６９年間末まで続いた。

２，ペナン

ペナンは、歴史上様々に呼び名が変わった。当初、マレー人はＰｕｌａｕ　Ｋａｓａｔｕ（一つの島）と呼んでいた。後に航海図にＰｕｌａｕ　Ｐｉｎａｎｇ（檳榔樹の島）として現れた。英国はＰｒｉｎｃｅ　ｏｆ　Ｗａｌｅｓ島と名付けた。マレーシアの独立とともに、元のペナンに戻った。現在も「東洋の真珠」「東洋への入り口」「寺院の島」などの呼び名がある。

１７８６年，英国東インド会社のフランシス・ライトが、３隻の帆船でペナンにやってきて、現在のフォートコンウォーリスに初めて上陸した。その時、ペナン島は漁民が浜辺に散らばって居住している人口１０００人にも満たない島だったといわれている。ライトは、同年８月１１日ケダ（現マレーシアの１州）のスルタンとケダポイントで交渉の末、ペナン島の譲渡を受け、ジョージ３世王の名において正式に領有した。当時英国は、インドと中国の中間に貿易船の避難、燃料などの補給、修理などを目的とする良港を探し求めており、また、オランダに対抗する根拠地を探していた。他方、１７８５年にビルマのシャム侵攻が発生、翌年シャムはビルマを追い払った後、対ビルマ戦不忠という理由でケダに懲罰軍を差し向けた。ケダはライトを通じ英国の援助を求めた。ここに両者の利害が一致し、ペナンは割譲された。ライトはペナンを自由港とし、これによってオランダと対抗できた。わずか８年で人口は約８０００人に増加、中国人、インド人が渡ってきた。１８００年、英国東インド会社はケダのスルタンと交渉し、ペナン島対岸のウェルズレイの領有を獲得した。１８０５年総督がおかれ、ペナンは、ボンベイ、マドラス、ベンガルなどと同等の地位となった。ライトの死の後１年である。

その後ペナンは英国経営の下、自由港として栄えた。コショウ、檳榔樹、樟脳、籐の集散地となるとともに、アヘン、スズ取引の中心地ともなった。英国はインドからペナンに来た時、インド人を伴った。セポイ（インド人傭兵、ライトの船には１００人乗船していた）、警察、商人である。１８２４年以来、道路工事のため多数のインド人流刑人が送り込まれた。１９１０年には職を求めて約８万人のインド人が渡来し、これらの移民は主としてゴム農園に就業した。１９世紀半ば、マレー半島の鉱山開発に伴い、鉱山労働者とし多数の中国人移民が流入した。

１９４１年第２次世界大戦の勃発とともに日本軍によって占領され、１９４５年英国軍の復帰まで３年あまり継続した。ペナンは、１９５７年マラヤ連邦の独立とともにその１州となり、１９６３年に現在のマレーシアが成立した時、その１３州の１州となった。

Ⅳ．ペナンでの生活

１，衣・食・住

（１）衣

常夏の国である。

私は、簡単に言えば、北海道の真夏の服装と同じである。

ペナン日本人学校の児童生徒については、制服が無いので全く自由である。

地元の学校の児童生徒には制服がある。一番多く見かけるのは、女子の白いブラウスにライトブルーのジャンパースカート姿である。非常に涼しげでさわやかである。男子は、白の半袖ワイシャツに深緑色の半ズボンが多い。インター校にも制服はある。

街を歩くと、基本的には日本の夏の服装とあまり変わらない。マレー系の女性、インド系の女性の民族衣装姿を多く見かける。ゆったりとしている。まれに頭にターバンを巻いているインド人男性を見ることもある。中国系の女性は、一般的に体にぴったり合った服を着ており、はつらつとしている。男性は、我々とあまり変わらない服装である。

（２）食

ペナンにも日本の食料品を扱うスーパーマーケットがある。値段は日本に比べると割高

になるが、日常生活にはほとんど支障がないほどの品ぞろいである。
ここペナンは「グルメの都」といわれるほど、様々な美味しい料理を安く食べることができる。マレー料理はもとより、中華料理、インド料理、西洋料理、日本料理などを楽しむことができる。ジャパニーズ・レストランは料金は割高であるが、地元の人にも人気が高く、一種のブームになっている。
家で料理を作るより安くおいしく食べられるそうで、屋台やキャンティーンはいつも繁盛している。

（３）住

近代的な中高層のコンドミニアム（分譲マンション）がたくさん立ち並んでいる。ほとんどの在留邦人は、このコンドミニアムに居住している。一方、リンクハウス、テラスハウス、マレー風カンポンハウス、イギリス統治時代の面影を残すコロニアル様式の建物も見られ、異国情緒たっぷりである。
赴任時には全員がアマさん（メイド）を雇う。仕事の内容や勤務時間等は、それぞれの家庭の事情があるので、話し合いで決める。私の家のアマさんは「ティオ」さんだ。中国系マレーシア人である。一日勤務を希望したが、彼女の家庭の都合で、月～金曜日、午前９～１２時、掃除と洗濯（アイロン）をお願いすることにした。人柄もよく、よく働く人であった。私ども夫婦にとって、心に残る大切なマレーシア人である。

２，交通事情

交通量が多く、自動車、オートバイ、自転車、トライショー（人力三輪車）、自転車やオートバイに簡易屋台を取り付けたような不思議な走行物などでごった返している。特に困るのがオートバイで、乱暴な運転に度肝を抜かれることがしばしばあった。また、一方通行やラウンドアバウト（ロータリー）が多いのも特徴である。最後は慣れてしまったが、命を縮めたような気がする。しかし、マレーシアは、東南アジアにおいて日本人が車をふつうに運転できる稀な国であり、工場進出の優位性の一つになるそうである。食事の時は、お酒を飲むのでタクシーを使った。ペナンはメーター制ではなく、だいたいの目安はあるらしいが交渉制である。
私は日本を出るときに国際免許証を取得し、現地で手続きをとり、マレーシアの免許証を取得した。
私が３年間お世話になった車は、マレーシア国産車プロトン社（三菱系）の「ワジャ」である。値段は確か日本円で約１９０万円であった。下取りは５０～６０％が相場のようである。多少のトラブルはあったが、よく走ってくれた。運転嫌いの私であったが、ドライブが多少楽しく感じられるようになった。

３，医療

ペナンの医療水準は高いといわれている。ある本には、日本の地方都市の医療レベルと書かれていたが、真偽のほどはわからない。私たち派遣教員は、毎年１回夏休み中に地元の病院で健康診断を受けている。配偶者も一緒である。血液、尿、血圧、胸部エックス線、心電図、腹部エコーの検査を受けている。胃の検査等はオプションである。日本の医学部を出た日本語のできる医師がいたので大変助かった。しかし、この３年間、夫婦そろって日本の市販の薬を恐ろしいほどたくさん使った。

４，教育制度

マレーシアの教育は、複合多民族国家をいかに統合していくかという大きな課題を抱えている。
マレーシアの学校教育制度は、初等教育（６年）、中等教育（７年）、高等教育の３段階に分かれており、また、後期中等教育以降、普通教育、技術教育及び職業教育に分化している。
マレーシアには、厳密な意味での義務教育はないが、中等教育のＦＯＲＭ６までの教育は授業料が無償であり、小学校への就学率はほぼ１００％である。就学年齢も日本と同じ６歳以上である。

中等教育は３段階に区分され、下級中等学校（LOWER SECONDARY SCHOOL）、上級中等学校（ＵＰＰＥＲ SECONDARY SCHOOL）及び大学予科、専門学校等の諸学校に分かれている。

下級中等学校は日本の中学校に該当し、修業年限は３年で、学年は第１学年よりそれぞれＦＯＲＭ１～３とよばれる。

上級中学校は日本の高校２年生までに相当し、ＦＯＲＭ４～５とよばれ、普通教育、技術教育、職業教育が行われている。

FORM ５修了後に大学準備課程があり、修業年限は２年で第１学年を LOWER FORM ６、第２学年をＵＰＰＥＲ FORM ６とよばれる。また、FORM ５修了後に進学できる学校として、教員養成学校（２年制・５年制）とポリテクニック（２年制・３年制・５年制）などがある。

高等教育は大学と大学院が中心である。大学の修業年限は学部によって異なり、文科系はおおむね３年、理科系は４年が多い。医科歯科系は日本と同じく５～６年である。

５，治　安

マレーシアは、東南アジアの中でも治安のよい国といわれている。しかし、日本に比べると、殺人その他の犯罪発生率は高いようである。私達在留邦人が実際に被害を受けている犯罪としては、「空き巣」、「ひったくり」が多いようである。「いかさまカード賭博」の被害も不思議に後を絶たないようで、特に若い旅行客が被害にあっている。「海外では自分の身は自分で守る」という「自己責任」が原則であり、油断はできない。

６，多民族国家

マレーシアは多民族国家である。マレー系、中国系、インド系、その他の人々が単純に融合消滅することなく､それぞれの文化を維持しながらのモザイク模様を織りなしている。

マレー系の人々は、穏やかである。はにかみながらの笑顔がいい。動作もゆったりとしてあわてない。マレーシアは豊かな国である。飢え死にすることもなければ凍え死ぬこともない。自然の恵みに支えられ、自給自足の生活が保障されている。ところが、そこにヨーロッパ列強の植民地争奪戦が始まる。経済力、軍事力、政治力に長けた先進国にかなうはずもない。いいように丸め込まれ搾取の時代が続く。やがて、スズ鉱山に中国人が、ゴム農園にインド人が労働者として流入してくる。マレー系の人々にとって中国人との競争はなかなか厳しく、「ブミ・プトラ（土地の子）政策」で保護されている状況である。

中国系の人々は、とにかくエネルギッシュでバイタリティにあふれている。

苦境に耐えてどこにでも根を張り、商売上手で経済界での実権を握っているといわれている。 家族の結束が堅く、大小を問わず一族総出の商売（経営）がほとんどである。また、同郷意識が強く相互扶助体制も強固なようである。

インド人も、独特である。憂いをただよわせた表情、落ち着いた静かな物腰、男女とも容貌に恵まれ、外見だけを比べると欧米人に遜色はない。インド人の貧富の差はかなり大きいようである。元来、彼らはインドでも貧しいといわれるタミル地方からの移住者が多く、掃除（トイレ）、道路工事、路上駐車の切符切り等々、マレーシアの最下層の仕事をしている場合が多い。一方、昔ながらの大商人、医者、弁護士もおり、彼らは別格である。

人口比率が約１０％ということが１番大きな要因かもしれないが、中国系、マレー系マレーシア人からも低く見られているような感じを受ける。

とにかく、異民族がお互いの歴史・宗教・文化等を理解し尊重し合い、とりあえずは節度と調和を保ちながら共存共栄している姿は、率直に驚嘆と賞賛に値する。ただし、その底に不満不平も渦巻いており、下手をすると爆発する危険性をはらんでいることも事実であろう。過去に大規模な暴動も起こっている。政府の舵取りが難しいが、私は素人ながら、よくやっていると評価している。指導された民主主義ということができると思うが、特に発展途上国では必要なことである。歴代の首相の努力とそれを支えた国民の努力に敬意を表したい。

７，宗　教

マレーシアの国教はイスラム教である。
イスラム教の概要について「広辞苑」より一部引用する。
世界的大宗教の一つ。６１０～６３２年頃、ムハンマド（マホメット）が創始。アラビア半島から東西に広がり、中東から西へは大西洋に至る北アフリカ、東へはイラン・インド・中央アジアから中国・東南アジア、南へはサハラ以南のアフリカ諸国に、民族を越えて広がる。サウジアラビア・イラン・エジプト・モロッコ・パキスタンなどでは国教となっている。ユダヤ教・キリスト教と同系の一神教で、唯一神アッラーと預言者ムハンマドを認めることを根本教義とする。聖典はコーラン。信仰行為は五行（信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼）、信仰箇条は六信（唯一神、天使、経典、預言者、終末と来世、運命）にまとめられる。その教えは、シャリーア（イスラム法）として体系化され、教徒の日常生活や人間関係のあり方、種々の社会制度から国家の統治までを規定。法学・神学上の違いから、スンニ派とシーア派とに大別される。中世には、オリエント文明やヘレニズム文化を吸収した独自の文明が成立、哲学・医学・天文学・地理学などが発達し、近代ヨーロッパ文化の誕生にも寄与した。三大聖地はメッカ・メディナ・エルサレム。回教。マホメット教。
宗教は難しい。宗教が国家間、民族間の血で血を洗う紛争になることは、過去の歴史や現在の国際状況を見れば一目瞭然である。従って、マレーシアの国教はイスラム教であるが、すべての宗教が平等に取り扱われるよう配慮されている。
おおよそ、マレー系はイスラム教徒、中国系は仏教・キリスト教徒、インド系はヒンズー教徒が多いようである。
それぞれの宗教的な行事があり、ペナンはさながらお祭りのごとく１年中にぎやかであった。

宗教とも関連があるので、マレーシア（ペナン）の祝祭日をあげておく。
５月　１日　レイバー・デー
５月　２日　マホメット・バースデー（イスラム教）
５月　３日　ウエサク・デー（仏教）
６月　５日　キングス・バースデー
７月１０日　ガバナーズ・バーシデー
８月３１日　ナショナル・デー
１１月　１日　ファースト・コーラン・デー（イスラム教）
１１月１１日　デーパ・バリ（ヒンズー教）
１１月１４日　ハリラヤ・プアサ（イスラム教）
１２月２５日　クリスマス（キリスト教）
１月　１日　元旦
月　　日　タイプー・サム（ヒンズー教）
２月　９日　チャイニーズ・ニュー・イヤー
月　　日　ハリラヤ・ハジ（イスラム教）
月　　日　アワル・ムハラム（イスラム教）
※陰暦やイスラム歴などのためにその年によって月日が変わる
※日本人学校は学校規則で、日本の祝日の中から「こどもの日」、「天皇誕生日」を休業日としている。

８，日常生活

（１）言　語

マレーシアの国語はマレーシア語（マレー語）である。学校教育においても国語教育に力を入れている。また、官公庁ではマレーシア語が使われている。一方、マレーシアは多民族国家なので、マレー系はマレー語（マレーシア語）を、中国系は中国語（北京語、広東語、福建語等）を、インド系はタミル語を使う。そして、日常生活語として英語が広く使われている。国際競争力を高めるためであろうが、英語教育にも力を入れており、最近、

小学校から理科と算数の授業を英語で行うことになった。
私は言葉ができないので、仕事に関することをはじめ生活上の諸問題についても、事務長に通訳をしてもらった。海外に出てみると、日本は語学の教育にもっと力を入れなければならないとつくづく思う。私にとって、言葉でのストレスは非常に大きかった。
マレーシア語とインドネシア語は同じマレー語から派生しているので、約９０％は共通しているといわれている。私はインドネシア語が、ほんの挨拶程度であるが、少々使える。これをマレー系マレーシア人に使うと驚かれ、とたんに心の距離が縮まる。たとえ片言でも現地では現地語を使う、これは相手を尊重する意味でも大切なことである。

（２）散　髪

散髪は、シャングリラホテルの理美容院へ行くのが定着した。他に２～３試してみたがやはりここがいい。男女両方で男性にとっては理容院、女性にとっては美容院ということになる。日本の理容院でおなじみの専用のリクライニングシート式ではない。背もたれのあるふつうのいすに座る。お茶とお菓子と雑誌を出してくれる。まずシャンプーから始まる。軽く頭をマッサージしたり、首筋や肩をもんでくれるのでありがたい。はさみは小さいものを使い髪をカットする。櫛と電気バリカンで側面の刈り上げ部分を整えるところが奇妙である。ひげは剃ってくれない。つまりカミソリは使わない。私も妻も通常は二人で９０リンギット（２７００円）である。
ペナンはマニキュア・ペディキュアはもちろんエステも非常に安くできるようである。
足裏マッサージや健康マッサージも盛んである。

（３）金　融

マレーシアの貨幣の単位はリンギットである。1リンギットは約３０円で計算していた。
支払いは、現金、小切手、カードである。小切手（チェック）を使うことが珍しく便利であった。カードは様々な犯罪が起こっているようなので、信頼できる店でなければ極力使用しないようにした。
通常は銀行のＡＴＭを利用するのだが、急に日本円を外貨に交換しなければならないときは、マネーチャンジャーを利用した。マネーチェンジャーは至る所にある。
外国で生活すると為替レートには多少関心が高くなる。
銀行にお金を預けると利子が付くことに驚いた。これは皮肉である。

（４）リゾート

ペナンは、マレーシアの老舗のリゾート地であるとある観光ガイドブックに書かれてあった。かっては日本からの直行便も飛んでいたらしいが今はない。観光客の人数の推移はわからないが、横ばいか減少傾向にあるのではないだろうか。時々、ペナン島北部のバツーフェリンギにあるリゾートホテルに、食事にいくことがある。また、中国正月の時は市街地の店がほとんど閉まってしまうので、観光客気分で避難的宿泊をすることもある。宿泊客は白人が多い。彼らはリゾートでの過ごし方が実に上手である。中近東からの旅行者も結構多い。私には黒装束の女性たちが物珍しく、つい目がいってしまう。異国のリゾートホテルで、外国人に混じってぼんやりとヒューマン・ウォッチングをするのも、また、楽しいものである。

（５）映画・ＴＶ

映画はマレーシア人の娯楽の一つである。ペナンで映画を２回見た。１回目は、「ラストサムライ」である。２回目は、「たそがれ清兵衛」である。ここの映画館はあまり大きくはないが、こぎれいでこじんまりとしているので居心地がよい。私が入った映画館は、二つとも大きなショッピングモールの中にあった。
ＴＶは、衛星放送でＮＨＫのニュースや海外安全情報をよく見た。都合で駒大苫小牧高の甲子園優勝を見られなかったのが、一番残念である。

（６）スポーツ

暑い国なので、気をつけないと体力はどんどん落ちる。また、海外での生活は何かとストレスがたまりやすい。健康増進、気分転換のためにもスポーツ（運動）が必要である。

現地の人々は、特に中国系の人々は健康管理に関心が強いので、早朝からウォーキングやジョギングに励んでいる。ホテルのトレーニング・ジムに通ったり、水泳、テニス、ゴルフ等で汗を流している人が多い。

マレーシアでは、ゴルフが簡単で手軽なレクレーションの一つである。私も、ゴルフが下手でなかなか上達しないので恥ずかしいのだが、月に１～２回程度、比較的年齢が近く、日頃より何かとお世話になっている日本人の方々とゴルフをすることを楽しみにしていた。職員も時々相手をしてくれた。北海道で夏はゴルフ、冬はスキー を生涯楽しみたいものである。ゴルフにはまだ多少の偏見が残っているようだが、スキーも国によっては、贅沢なあこがれのスポーツなのである。

（７）懐かしい人々

仕事の上で、あるいはまた私生活でお世話になったマレーシア人、日本人の方々がたくさんいる。様々な出会いや出来事について書き出すと膨大な量になりそうなので、ここでは割愛する。

９，その他（あれこれ）

①電気は２４０ボルト／５０サイクルである。トランスを使えば日本の電気製品は使用できる。停電は少なく電気代も非常に安く電気の供給は安定している。
②時差は日本より１時間遅れである。
③普通郵便は、日本～マレーシアは通常約１週間である。日本からの小包は開けられ、品物によっては呼び出しを受け税金を徴収されることもあるので、注意が必要である。
④電話代は安かった。毎月請求明細書が郵送され郵便局で支払う。契約時に支払ったデポジットも帰国時に解約手続きを済ませていたので当然だが、間違いなく日本に送られてきた。携帯電話は必須である。
⑤電気・ガス・水道代は安い。安全のため水道水は飲用しなかった。ボトルド・ウォーターを買って飲んだ。浄水器も買った。「安全と水は金で買え」である。
⑥退職者の「ロング・スティ」も増えている。生活費が安い、食べ物がおいしく日本人の口に合う、医療もとりあえずは安心できる、治安も比較的よい、自動車も自分で運転できる、言葉も気楽な英語で十分、旅行にも便利、等々が人気の理由のようである。
⑦第２次世界大戦では一時日本の占領下にあった。一部に反日感情を抱いた人がいることを忘れてはいけない。

Ｖ．ペナン日本人学校の概要

１，学校設置者等

①学校設置者・・・・・・・・　ペナン日本人会
②学校運営主体・・・・・・・　学校運営委員会(日本人会教育部会)
③日本人学校のステータス・・　マレーシア国法における私立学校
　　日本の関係法規における認定在外教育施設

２，沿　革（抄）

①昭和４６（１９７１）年度　クアラルンプール日本人学校による補習授業と聴講
②昭和４７（１９７２）年度　ペナン日本人学校設立要望書提出
③昭和４８（１９７３）年度　ペナン開発公社より校舎の斡旋
　　大使館より昭和４９年度学校予算の認可
④昭和４９（１９７４）年度　政府派遣教員２名着任
　　開校式（児童数１３名）
　　中学校補習授業開始
⑤昭和５２（１９７７）年度　小学部単式学級で授業開始　中学部全日制で授業開始
⑥昭和５４（１９７９）年度　KENYON-REA METHODIST SCHOOL 廃校
　　校章発表会
⑦昭和５５（１９８０）年度　敷地・校舎全面借用(メソジスト教会より総領事館が借用の形)　校歌発表会

⑧昭和５９（１９８４）年度　　開校１０周年記念式典挙行
⑨平成　３（１９９１）年度　　エアコン設置
⑩平成　４（１９９２）年度　　プール完成
⑪平成　６（１９９４）年度　　開校２０周年記念式典挙行
⑫平成１０（１９９８）年度　　教室防水扉設置
⑬平成１２（２０００）年度　　ゴールデンプラウ号 総領事館より本校へ譲渡
⑭平成１３（２００１）年度　　花壇設置　側溝改修
⑮平成１４（２００２）年度　　図書室改修　正面玄関床工事
⑯平成１５（２００３）年度　　コンピュータ２５台入替　アスファルト舗装工事
⑰平成１６（２００４）年度　　開校３０周年記念式典挙行　３０周年記念誌発行
体育館床板張り工事
ゲート自動化　監視カメラ・モニター設置

３，教職員

①政府派遣教員　　１５名
②現地採用教職員　英会話講師４名　水泳コーチ１名　事務員３名
用務員等（警備員、運転手、掃除、庭師）４名

４，児童生徒数

児童生徒数の推移

	昭和５３年度	昭和５７年度	平成７年度	平成１７年度
小学部	５２名	９３名	１４７名	１２１名
中学部	３名	１９名	６０名	３３名
合　計	５５名	１１２名	２０７名	１５４名

５，入学条件（学校規則第８条）

学校に入学できる者は、マレーシア国ペナン州および周辺に在住する日本国籍を持つ日本人の子女とし、満６歳に達した月の翌日以後における最初の学年の初めから、満１５歳に達した日の属する学年の終わりまで、就学できるものとする。

ただし、入学を希望する子女の保護者はペナン日本人会個人会員であることと、保護者または保護者が属する法人は、別に定める特別入学金を納付することが必要である。

なお、特別の事由により、校長が必要と認めた場合には、運営委員会承認のもとに子女を入学または就学させることができる。

６，必要経費

①入学金・・・・・・・児童生徒１名につき・・・・・・・ＲＭ４００（１回限り）
②授業料・・・・・・・児童生徒１名につき・・・・・・・ＲＭ３９０（月額）
③特別入学金・・・・・１家庭につき・・・・・・・・・・ＲＭ５００（１回限り）
※法人に所属している家庭は不要
④通学バス代・・・・・児童生徒１名につき・・・・・・・ＲＭ８０（月額）
⑤父母会費・・・・・・１家庭につき・・・・・・・・・・ＲＭ１５（年額）
※ＲＭはマレーシアリンギットで１ＲＭは約３０円換算

７，教育内容

(1)基本的には、日本の学習指導要領に準拠した教育が行われている。
(2)小学部６学級、中学部３学級で編成している。
(3)小学部は４５分、中学部は５０分授業を行っている。（年間授業日数２００日）
(4)小学部４年生から中学部３年生まで、週１回クラブ活動を実施している。
(5)毎月１回、金曜日に児童・生徒会活動を行っている。それ以外の金曜日には、小学

部は学級裁量の学級活動の時間、中学部は補習を実施している。
(6)英会話の授業を、小学部１年生から中学部３年生まで、習熟度別４グループに分けて、週２時間実施している。４名の常勤ローカル英会話教師が指導に当たっている。
(7)水泳の授業を通年週１回実施している。現地水泳コーチと本校体育教師が指導している。
(8)毎朝１５分間、全校一斉清掃を行っている。
(9)毎朝１０分間、朝読書を実施している。
(10)年３回、全校児童生徒を３グループに分けて、日本人墓地清掃を実施している。
(11)小中合同で、入学式（４月）、卒業式（３月）、運動会（６月）、学園祭（９月）を実施している。
(12)民族音楽鑑賞会をマレー系、中国系、インド系と３年１サイクルで実施している。
(13)小学部６年生、中学部２年生は修学旅行、小学部５年生は宿泊学習を、それぞれマレーシア国内で実施している。校外学習も盛んに行われている。
(14)小学部低・中・高学年、中学部がそれぞれローカル校４校と交流活動を行っている。
(15)校内授業研究会を、小学部低・中・高学年、中学部と、年４回実施している。
英会話についても授業を参観し、授業について話し合う場を設定している。
(16)職員研修を年１回実施している。ローカル校訪問、企業訪問が主な内容である。
(17)避難訓練を年３回、想定や避難方法を変えて実施している。そのうち１回は、緊急電話連絡網を使っての引き渡し訓練である。
(18)ほとんどの児童生徒はスクールバス（業者委託）で通学をしている。
(19)全員が弁当・水筒持参である。
(20)これまでの本校安全対策を整理・統合・補充して安全対策マニュアルを作成した。ゲートの自動化、監視カメラとモニターの設置、インターホンの設置等、施設設備面での改善を行った。
(21)開校３０周年記念行事を、児童生徒、保護者、教職員、運営委員会、日本人会が一致協力して盛大に挙行することができた。３０周年記念誌も発刊した。
(22)現地教育事情調査が派遣教員の任務として義務づけられた。
(23)派遣教員について自己申告書・業績評価制度が実施されている。
(24)父母会役員連絡会議を月１回程度開催している。保護者から集約された質問・意見・要望について回答したり、学校の方針や動向について説明したりするなど、理解と協力を得るためのよい機会となっている。
(25)学校運営委員会、日本人会理事会がそれぞれ月１回開催されている。
(26)英語検定、漢字検定、数学検定を実施している。（ボランティア）
(27)長期休業や土・日曜日に野球型スポーツ教室を開催している。（ボ）
(28)地域スポーツクラブに指導者・サポーターとして援助している。（ボ）
(29)各種行事での和太鼓の演奏や合唱などの音楽活動を実施している。（ボ）

８，その他

①入学希望の事例（家庭環境）の多様化と対応
②日本国内高校受験およびインター校受験に関する規制緩和の要望
③特別に支援を要する子どもの指導体制の必要性
④課外活動充実への要望
⑤英会話力向上への期待
⑥児童生徒数の減少傾向

日本人学校の使命は、子ども一人一人に日本人としての基礎基本を確実に身につけさせること、世界から信頼尊敬される国際性豊かな日本人を育成することにある。